

論文

オーストラリア英語の語彙の諸相

大 瀧 真

I 序論的考察

(1)

英国人ダンピア (William Dampier) の一行がオーストラリア大陸に足を踏み入れたのが1688年、それから80年あまり経った1770年に、同じく英国人の航海王クック (Captain James Cook) が東海岸を調査し、東岸一帯を占有してニューサウスウェールズという名称を与えることになるが、英国の18世紀の英語がこの南半球の新しい環境に始めて移植されたのは、このクックの上陸から18年を経た1788年に英本国からの 'First Fleet' が入港した時と見るのが妥当である。これをアメリカ英語の場合と比較してみると、Pilgrim Fathers が移住したのが1620年であるから、アメリカ英語 (American English; 以下 AmE と略す) の発達史とは比べものにならないほどオーストラリア英語 (Australian English; 以下 AustE と略す) の歴史は短かく、その言語史はせいぜい200年である。同じ南半球にあって、オーストラリアとも地理的に近く、AustE と発音・語彙の両面で多くの類似点を持つ英語と指摘されるニュージーランド英語 (New Zealand English; 以下 NZE と略す) となると、植民地として正式に入植が始った年が1840年であるから、更にその歴史は短かい。この200年ほどの期間に、AustE は英本国とは異なる地理的、地勢的、文化的、社会的条件の下で、必然的に、AmE あるいはカナダ英語とも違う独自の発達を遂げ、英語の異種を形成して今日に及んでいるのである。

大陸の約38.6%が熱帯に属し、東西の距離3,860km, 南北3,200km, その面

積は約770万平方キロメートルで、英本国の約30倍の広さを持つオーストラリア大陸は、地域によって気候に大きな差異が認められるだけでなく、風土、地形、動植物の分布のどれをとっても、英本国とは大きな開きがある。年間雨量150インチの地域もあれば、5インチにも満たない地域もあり、また数年間、全く降雨のない砂漠地帯もある。従って、この南半球に位置する‘Down Under’（オーストラリアを指す）に住むオーストラリア人（俗語で Aussie または digger という）は、一般に季節感が乏しい。

北半球の真冬は、オーストラリアでは6、7月であり、Christmasは真夏の時期に当る。従ってChristmasという語が持つ内包(connotation)には当然変化が生まれ、英米人が用いる midsummer（真夏）という語は廃れて行くと共に、Christmas または Christmastide という語に取って代られる結果となる [Morris, p. 87&p. 292]。

オーストラリアでは、都市を離れればうっ蒼たるユーカリの樹木がどこまでも広がっているという自然の風景の違いから、forest や woods に代って ‘bush’ 「奥地・森林地帯」が用いられている。この語からは ‘bushfire’ を始め、 ‘bush lawyer’ 「法律を知っている振りをする人」、 ‘bush telegraph’ 「うわさ：情報などの急速な伝達」などの複合語が造られ、 ‘be bushed’ 「(奥地で) 道に迷う；途方に暮れている」などの動詞用法が生まれていて、オーストラリア人の日常語となっている。「土手一杯に水かさが増した川」は ‘banker’ 「袋水路；流れの淀んだ分流」は ‘billabong」と言う。語彙については他の英語圏と相当な差異が見られるが、bushman「奥地居住者」に親しまれた質素なパンは ‘damper’ 「食物」は ‘tucker」と言い、これらは日常の俗語に入っている。

以上の例からもわかるように、地理的・地形的条件が異なる場所に生きて行かなければならないという生活の現実、そこに住む人たちの言語に何らかの影響を及ぼし、変化を促すのが言語的原則である。

持ち合せの既知の語彙——一般標準語もあれば俗語もあるが——を類似のものに当てはめるか、意味内容を変化させて適用するか、あるいは既存の語を組み合せて複合語を合成したり派生語を造り出して行くか、あるいはまた、原

住民や他のヨーロッパ系民族のことは借用するか、などの方法をとるのが通例である。本国とは別世界の奇異な環境に置かれた最も初期の移住者たちも、この方式に従った。オーストラリアの 'robin' は英国や他の地域の robin と違ふし、'oak' も英国のとは別種のものである。合衆国への初期移住者たちが原住民の言語（アメリカ・インディアン語）から moose, racoon, chipmunk, wigwam, moccasin 等の語を借用し、既知の語彙から bullfrog, gartersnake, mud hen; medicine man, paleface などの語句を造り出して生活の必要を満たしたのと全く同じように、AustE でも既知の語彙を組み合せ、植物に対して blue gum, sugar-grass, iron bark, thousand-jacket; 鳥に対しては, settler's clock, lyre bird, watchman's whipbird, forty-spot; 魚名として long-fin, trum-peter などの語句を造り出し、オーストラリア原住民 (Aborigines) の原語からは、動物名の brumby, wombat, wallaby; 鳥類の bookbook, currawong, kookaburra; また原住民の武器・生活・人間に関係する語として boomerang, hielamon, gin, lubra, corroboree, humpy, mia mia; 植物名として mulga, coo-libah, karri, jarrah などの土語を借用したが、これらは AustE の中で息づいている。

フランス人、ドイツ人、オランダ人、スペイン人が各所に植民地を築き、彼等の言語から借用して語彙を豊かにした合衆国の場合と異なり、他のヨーロッパ民族との接触による語彙の借用は、AmE から入ったものを除き、ほとんど認めれない。ドイツ語、アイルランド語、スコットランド語が AustE に及ぼした影響は極めて小さかったと言ってよいであろう [Ramson (1966), pp. 152~163]。

(2)

原住民語からの借用、既知の語彙から造り出す複合語や派生語という造語法だけでなく、古い語彙に新しい意味を与えていく意味の拡大・一般化・転用等の手段も、語彙を増やす上で有効だった。例えば、方言から入った paddock という語は「小さな野原、囲った土地」(AND: 'a small field or encl-

大瀧 真

sure') というイギリス英語 (British English; 以下 BrE と略す) 本来の意味から、「(大小の広さに係りなく) 囲った牧草地」(APOD: 'a field, meadow, fenced piece of land of any size') という AustE の意味に変えて使用し、馴染みの薄い field という語に代る語として定着し、この語から更に to paddock 「柵で囲む; 囲い地に入れる」という動詞用法も生まれた。同じ方言から入った run 「放牧場, 牧羊場」は、最初「借地」の意味を持ち、次に「柵のない牧羊 (または牧牛) 場」の意味に変わり、今日では柵の有無に関係なく, station 「大牧場」の一部または全体を構成している。

牛や羊の群れを表現するのに 'a mob of cattle', 'a mob of sheep', 'a mob of lambs' などのような mob の拡大用法が進むと, herd や flock という語の使用は当然廃れて行った。また本来, 軍隊用語で「(兵士, 囚人を) 召集する, 集合させる」意味を持った muster という語を「(家畜を) 駆り集める」という意味に転用させた。AmE の ranch は AustE で station というが, この語は流刑地で1820年代初期に普及し始めた。convict slang の一つで, 現在は property よりも規模の大きなものを指し, 「(建物を含む) 放牧地; 大牧場」を意味している。初期の植民地における sheep station 「牧羊場」では, 流刑囚の生活に関連のある語をずっと用いていたようである。例えば, hut や overseer, superintendent などの俗語が使われていたが, hut は「流刑囚の宿舎」という意味から「牧夫または鋤夫の宿舎」に変わり, 一方 overseer と superintendent (略して super) とは, 前者が1822年頃, 後者は1863年頃までに「囚人の監督官」という意味から「農場または大牧場の監督・管理者」へと意味が変化している [Turner, p. 69; Ramson (1966), pp. 84-5]。

station からは他の語と組み合わせて stock station, heifer station, head station, home station, out-station, outstationed, back station, station super (mark, jack) 等, 複合語が続々誕生し, 語彙を豊かにしていったのである。

社会, 政治あるいは教育の仕組みの差異が, 語彙に反映することがある。英国では「首相」は prime minister または premier で, 意味に違いは生じないが, オーストラリアでは1901年のオーストラリア連邦結成以来, Common-

wealth government と State government について上の 2 語は区別して使われ、prime minister は「連邦首相」、premier は「州首相」を表す時に用いる。また public school は英国と違い、通例「公立学校」の意味で使われる。「村」や「小さな町」は township (Morris: 'a village'; ACOD: 'small town, town-site') と言うが、これはニュージーランドでも同じである。

AustE は、他の英国圏と比べ、口語あるいは俗語のレベルで語彙的差異がかなり著しい。例えば、「ドレス」は frock, 「防寒着」は anorak ではなく parka, 「応援する」は barrack for ~, 「怒る」は go crooked at (または on) ~, 「からかう」は chiack (または chyack), 「仲間、友達」は cobber, 「病気の」は cronk, 「間抜け」は dill, drongo, 「今日は！」は Goodday!, 「バス運転手」は bussie, 「プレゼント」は pressie などと言う。「よくやった、さすが君だ！」は Good on you!, 「すばらしい (Great) !」は Beaut! などと表現し、'He's a dinkum Aussie.' は「正真正銘のオーストラリア人だ。」の意味となる。AustE で「(週末、休日用の) 小別荘」は weekender と言うのに対し、NZE では bach を用いるなどの差異は見られるが、smoko 「休憩時間」、arvo 「午後」などの語は NZE とも共通である。

The Australian POD の 'Introduction (§ 74)' の中で、編者 G. Johnston は次のように述べている。

'... many Australians make no sharp distinctions between formal and informal speech.'

AustE の一つの特徴は、他の英語圏の英語と比べ、口語または俗語的表現が顕著であると言えよう。

(3)

移植された言語は、本国の言語と比較して、しばしば「保守性」が強くなる傾向が見られる、というのが言語の一般的原则である。例えば、BrE では廃れてしまった言語の特質——17, 18世紀の英語の特徴や、英本国ではもはや一般的でない古い語彙や用法など——が、AmE に保持されているという、

大瀧 真

AmEのArchaismについては、よく指適されることであるが、AustEについても、英本国では一般的でなくなっていた地域方言や都市の俗語に由来する語に息吹きを与え、それらを多数使用しているという意味で、この「保守性」は十分に認められる。

一方、上述したように、新しい社会における生活上の必要性を満たすために、手持ちの語彙のストックから新たに複合語や派生語を次々に造り出し、あるいは語義の転用・拡大・縮小等によって、語彙に新しい語義を付加してオーストラリア独自の用法を確立して行くという点では、力動感と生気に溢れた語形成の傾向を示していて、「革新的」であると言える [Ramson (1970), p. 33]。

AustEの発達の歴史は、語彙に限って概観すれば、1788年、第一次船団がシドニーに到着した時から1851年、バサースト、クルーンズ、バララットの各地で金鉱が発見されたゴールドラッシュの幕明けまでが植民地時代、次いで1890年頃までのゴールドラッシュ時代の繁栄期を経て、大衆が「オーストラリア人」としての意識に目覚め、ナショナリズムの高揚と民族国家としての統合を実現して、第二次世界大戦へと続き、更に、大戦以後から現代へと続く流れとしてとらえることが出来るであろう。本稿は、AustEの語彙の特色がほぼ出揃って、AustEの基盤を確立した初期入植の時代から、ゴールドラッシュに至るまでの期間の語彙の特徴を主として記述し、またそれ以降の語彙・用法についても出来る限り言及することによって、オーストラリアニズム (Australianism) の明確化をはかり、AustE特有の語彙・表現が示す多様性を浮き彫りにしたいと思う。

II AustEの起源

オーストラリア開拓史の第1ページは、1788年1月20日、ボタニー湾植民地の初代総督に任命された退役海軍将校アーサー・フィリップ (Captain Arthur Philip, 1738~1814) に卒いられ、約1,500人の人々を乗せた最初の船団

が、8ヶ月の長い航海の後にボタニー湾に入港した時をもって始まる。この1,500人のうち、約半数(750余名)が7年、14年、あるいは終身の流刑と強制労働の判決を受けて送られて来た流刑囚(convicts)であり、残りの半数は、民間の役人(司政官)、軍の将校、海兵隊たちであった。この流刑制度は、英本国にとって、流刑囚の更生と刑罰を目的としたものであったが、同時に、植民地に労働力を供給するという目的もあったのである。この第一次移民船団は、'The First Fleet' と呼ばれ(送られて来た人たちは'first fleters'), 以後 Second Fleet (1790), Third Fleet (1791)と続くことになる。

オーストラリアに移住したこれらの最も初期の人たちのうち、植民地社会で最上層を占める総督や文官、一部将校たちは、概ね中流程度、つまり英本国ではジェントリー(地主階級)の家系の出身で、身分相応の中等教育を受けていた。従って、彼らの話していたことばは、恐らく18世紀の標準英語であり、一方、流刑囚と軍人たちは、ロンドンの地域方言(Cockney)あるいは、地方の方言を用いていたと推定される[Partridge & Clark, pp. 85-6]。

当時のロンドン犯罪法はさきわめて苛酷で残忍なものであり、社会で貧困に喘ぐ者が大勢いる、といった社会状況であった。反逆罪を含む罪人が、オーストラリアへ流罪になるということはなかった。オーストラリアへ送られて来た流刑囚たち(その大半は都市における犯罪のプロ)の罪状も、今日から見れば軽犯罪に属する者も多く、例えば、メッキをした靴の留め金2組を盗んで流刑7年の判決を受けた者もいた。彼らは、軍人たちの大部分よりましなタイプだったようで、オーストラリアの高名な歴史家 W.K.Hancock 教授によって証明されているように、この国の伝統に及ぼした彼らの影響は軽微で、むしろ有益なものであったとされている [Partridge & Clark, p. 85 ; Turner, p. 7]。

18世紀末の社会的背景としては、1780年代、特に1782年から88年の英国では、産業革命によって家内工業が没落し、それに伴う失業者、エンクロージャによる土地喪失者が続々、新工業都市として成長し始めた都会へ、主に近郊の地域から集中したが、都会へ移住して職を失った多くの者たちは、スラ

ムでの生活を余儀なくされ、生活の必要から犯罪に走った。そのため、犯罪が激増し、国内の監獄では収容し切れず、社会問題を引き起こしていた。このような状況の下にあって、オーストラリアの東海岸が流刑植民地 (penal settlement) に選ばれることになったのである。

ここで、AustE の起源を辿る意味からも、最も初期の流刑者を含む移住者たちの出身地及び人種の構成を調べておく必要がある。1850年以前における移住者の正確な記録は得られないが、イングランド南部とアイルランドで犯罪者の数が増加して事実があり [Turner, p. 4], またその頃、イングランド、ウエールズ、アイルランド、スコットランド系の者たちが移住したことを示す記録が残っている [Ramson (1966), p. 50]。

初期の一般移住者と流刑囚の圧倒的多数は、イングランド南部の都会からやって来たと推定され、入植者と囚人の比率は、ある見積りによると、1 : 4 または 1 : 5 となっている [Mitchell & Delbridge (1971), p. 28]。1791年にアイルランドから政治犯が運ばれて来たが、これはカトリック教の初上陸を意味し、オーストラリアの文化構造に重大な影響を及ぼす出来事でもある。これ以降も、アイルランドから直接、流刑囚が送られ、1793~1802年の間は、到着した人たちの41%を占め、流刑囚全体の約30%に達している。ただ、1850年以降は、それ以前に比べて低くなっている。

一方、スコットランド人は、その数も少なく、中程度の小作農で教育もあった。ニューサウスウェールズとバン・ディーメンズランド (今のタスマニア島) に送られた男の流刑囚の約40%は、ロンドン、ランカシャ、ダブリン、ヨークシャ、ウオリックシャ、及びサリーから来ている。1817年から19年にかけて、英本国の社会情勢から、また輸送船が増えたことなどの理由から、ニューサウスウェールズに輸送される流刑囚の数が激増、1819年の植民地の人口も増加した。

このように見てくると、恐らくロンドンを中心とするイングランド南部の諸都市、あるいは発展する地方の工業都市に隣接する地域の、貧困で、もっぱら非標準語を話す、概して不熟練な労働者たちが大多数を占めていたと見

てよいであろう。これらの事実から、AustE はその起源において、

- (1) 都会語であった。
- (2) 貧しい労働者階級のことばであった。
- (3) イングランド南東部の都会語と Irish とが大きな比重を占めていた。
- (4) イングランドの地方方言, Welsh, Scottish に特有な言語的要素が僅かに混入していた。
- (5) 流刑囚が多数を占めていたため、俗語、卑語（特に criminal cant）の使用が顕著であった。

などがその主たる特色であると言うことが出来る [Ramson (1970), p. 9; Mitchell & Delbridge (1971), p. 29]。このような都市のことばが、今日の AustE を形成する基盤になったのである。19世紀末までに、非英国系の移住者の占める割合は全人口の10%を越えたことはなく、移住者のほとんどは、イギリス諸島出身者であった。

Ⅲ 植民地時代の AustE

(1)

環境が変わって新しい事物、特質、概念、知識について述べる必要が生じた時、他の言語から借用したり、既知の語彙を新しいものに適応させ、意味内容を修正・変化させたり、あるいは熟知した語彙を構成要素として、新しい複合語や派生語を生み出したりするのが普通である。1688年、William Dampier はオーストラリア北西部（現在の西オーストラリア）を訪れ、ユーカリ (eucalyptus) の樹木を見て、‘Dragon-trees as we supposed’ と表現し、原住民 (Aborigines) の武器を ‘wooden swords’, ‘a sort of Lances’ などと描写したが、1770年に東海岸を探検した Captain Cook は、ユーカリを ‘gum tree’ と述べ、また woomera (土語：槍を投げる道具) のことを、‘throwing sticks’ と記録した。これ以後、後者は1885年頃まで使用され、土語から入った woomera と使用において競い合うことになる。

kangaroo という土語は、Cook の一隊が英本国にもたらした最も古い語であり、またこの語にまつわる民間語源は、これまでも種々取り沙汰されたが、当時、現住民たちは犬以外のあらゆる動物に対してこの語を用いた。boomerang は、これより遅く、1827年に記録されている。

ところで、東部への入植が開始されてから、東部への流刑が廃止されるまでの60余年間に、多数の流刑囚が送り込まれたことになるが、当時の流刑体制は、けたはずれに厳しいものであり、法と秩序を乱す者に対しては、重労働、鞭打ちの刑、他の特別地域への流罪などがあり、それらに関連した用語が、AustE の歴史上の語彙として名残りをとどめている。例えば、scrubbing brushes（小麦紛よりも、もみがらとふすまが多く入っているパン）、tester（25回鞭で打たれる折檻；‘Botany Bay dozen’ として知られている）、bob（50回の鞭打ち）、bull（75回の鞭打ち）、canary（100回の鞭打ち）などの他に、red shirt（鞭打ち刑で真赤になった背中）、logs（< log prison; 刑務所）などが挙げられるが、これらは植民地で使われた convict slang の最も初期の例である。

オーストラリア人にとって、‘convict’ という語は特別の歴史的意味を持ち、かつてこの語に極めて敏感な反応を示した。このため、囚人(jailbird)を述べる時には婉曲語句として、Government man（彼らは自分たちをそういう名称で呼ぶことを好んだのだが）、canary, crossbred, legitimate, Cockatoo bird, transportなどが用いられ、後になって更に exile, absentee, empire builder, patriot, pioneer などの別の婉曲語で呼ばれるようになり、これに対し、一般移住者は, aristocracy, sterling, pure merino, illegitimate などの名称で呼ばれたのである。「元囚人または仮出獄者」には old lag が使われた [Baker, pp.24-5]。

開拓初期において、度重なる深刻な食糧不足が植民地を窮状に陥れ、労働力を囚人に頼って農業や建設の仕事に当らせる方法だけでは、植民地の発展は望めない状態であったことから、自由入植者の渡来が促進され、1807年以降、資本を持った自由入植者が少しずつオーストラリアの各地の植民地に渡

来し始め、それから10年後には、どっと大挙して押しよせるようになるのだが、これに呼応して、囚人を労働者として入植者に割り当て、将校には土地を下付して囚人の労働力で農場を開発し、「刑期満了者」(expiree)に土地を下付する制度が定着することになるのである。このように「(無給で)割り当てられた使用人」は, assignee, また「囚人の割り当て制度」は assignment system と呼ばれ、1938年廃止されるまで存続した。刑期を満了した時、あるいは勤勉を認められた模範囚が赦免されたり、条件付特赦(ticket-of-leave; 「仮出獄許可証」。略して 'leave' という)を与えられたりした時に、始めて自分自身のために働ける自由を得たのであった。「完全(または条件付)特赦を受けた囚人」は emancipist と呼ばれた。そして、この語はやがて「元囚人」を意味するようになるが、これらのエマンシピストたちは、いずれ、親英的な一般入植者たちと対立することになる。

これら囚人上がりの者たちの存在は、一般入植者にとって社会的のみならず政治的にも一大脅威であったため、彼らに公民権を与えることに激しく反対する一般入植者もあり、このような人たちは exclusionist または exclusive と呼ばれた。これらの語は一般的というより、むしろ専門的な語彙に属しているであろう。

(2)

入植初期の人たちが用いていた語は、どのような特色を持っていたのだろうか。1791年、W.Tench は、植民地で 'flash language' (悪漢仲間の隠語) が用いられ、裁判所ではしばしば通訳を必要としたことに言及し、また1829年、Edward G. Wakefield は、「A Letter from Sydney」の中で、俗語や隠語が、刑務所から総督の官邸に至るまで我が物顔で横行していると書いている [Baker, p. 3; Turner, p. 9]。

また1819年頃に英国から渡来した人々は、「植民地生まれの子弟」(currency lad) が、体格的にも話し方にも「英国生まれ」(sterling) と異なる特徴を示していることに気づいている。両親を真似、口早に、通語を混じえて独得の発

大瀧 真

音をしていたという指摘もある[クラーク, p.52]。

常習的スリで、ニューサウスウェールズに3回送られたことがある James H. Vaux が、1812年に編んだ *New and Comprehensive Vocabulary of the Flash Language* という書物には、英本国とオーストラリアで流布していたと思われる俗語・隠語を記載しており、例えば、bush'd(=penniless), chum (=a fellow prisoner; 従って new chum は「刑務所の新入り」), down(=a suspicion; discovery), leary(= cunning; alert), push(=a concourse of people; a crowd), awake(= see through; comprehend), hog(= a shilling), swag(= stolen wearing-apparel; booty) といったように、元来、犯罪者仲間の隠語(cant)に由来する語が数多く使われ、このことは、入植初期における言語使用の実態の一端を示しているとみてよからう[Ramson, pp. 10-11 ; Baker, p. 14]。

これらの他に、1850年以前の資料を詳細に調査した Ramson によれば、例えば、総督の植民省へ送った公文書の中に時たま散見される語彙、探険家の日誌、入植者や英本国からの訪問者の日誌と手紙の中に出て来る cattle run, blackfellow, hutkeeper, squattocracy, crawler,あるいは現住民語の billabong, yarra, corroboree, lubra, mia mia, それに bush, brush, station 等の語の使用、また 'bloody' という語の度重なる使用についての言及などが見い出され、これらの語が当時一般に普及していた事実を知ることが出来る[Ramson, pp. 33-47]。

初期入植者にとって、最も貴重で利益の上がる商品はラム酒であり、これを硬貨代りに使って賃銀を支払ったり、物々交換を行っていた。'rum'は植民地では「酒」一般を示す語であった。これなどは、意味が一般化した例である。ついでに、「密売酒」は sly grog, それを扱う「密売店」は sly grog shop, 「安っぽい飲み屋」は sly grog shanty と言うが、これらの語も当時から使用されている古い俗語である。

(3)

1791年、ニューサウスウェールズ軍団の将校として着任したジョン・マッ

カーサー (1767-1834) は、シドニーの南西40マイルの下付地にキャムデン牧場を興し、15年間メリノ種の羊毛の飼育に努め、今日のオーストラリアにおける牧羊業の基礎を確立した。都会出身者が多かった初期入植者は、農耕や畜産、あるいは鉱山に関する技術用語を豊富に身につけていたわけではなかった。地域方言を持ち合わせていたとしても、前述した如く、主として発展途上にあった工業都市に隣接する地域の方言であった。例えば入植者たちは、恐らく羊・牛の群れを示す flock や herd ——これらは古語に近い語彙であった——の適切な用法にうとかったために、‘a herd of kangaroos’ (1811), ‘a flock of kangaroos’ (1835) のように表現し、次第に mob を動物、特に羊や牛に限定して用いるようになった。

牧羊業者 (squatter) たちは、やがて、放牧用の土地の拡大をはかるために、奥地 (bush) や内陸部 (out-back) に足を踏み入れて行くことになるが、今挙げた squatter と bush の2語について説明を加える必要がある。

まず squatter であるが、‘to squat’ という動詞の米語用法として、「新しい未開懇または占拠されていない土地に無断で定住する」(OED) の意味があり、このような米語から ‘squat’ は1827年に、名詞の ‘squatter’ は1833年に AustE に借用されたとしている。squatter は最初、上の米語用法の意味を持つ名詞として「所有権を持たない定住者 (不法占拠者)」という意味で使われ (OED), 元囚人である者が樹皮の小屋を建てて、動物を盗んだり、山賊 (bush-ranger) に手を借したり、酒を違法販売したりするなどの不法行為を行い、利益を上げた。そのため、1840年代までには、この語はかなり悪名高い語になったが、50年代の初めに実質的な変化を見せ始め、1903年には「牧場主、大牧羊業者」の意になり、今日の「大地主」の意味が出た。この語からは squatterdom, squattocracy, squattocratic などの派生語も生まれた。そして、1940年代の終りまでには、pastoralist と grazier がこの語に代って用いられる傾向が強まった。かつては軽蔑的な意味を持っていた語が、徐々に意味を向上させた ‘Amelioration’ の例である。

次に bush という語であるが、これはオランダ語 ‘bosch’ に由来し、喜望峰

経由でオーストラリアに移入された、というのが Baker 説[p. 75]で、1803年を名詞としての初出と記録しているが、Ramson は、その証拠がないとして、OED に従った E. Morris の説を引き、本来はオランダ語起源で恐らく 'bosch' の直接の採用であろうとして、bushranger 同様、アメリカ人から借用したらしいと述べている。そして早くも1800年に、ハンター総督が bush を用いている事実に触れている [Ramson, pp. 141-2 ; Morris, p. 68]。

19世紀初頭、bush は 'in the woods, or bush, as it is called here.' のように使われ、その定義は 'woodland, forest, untilled district' (ACOD, p. 134) で、「奥地・森林地帯・未開墾地」を意味し、更に 'country as opposed to town' の意味でも使われる。つまり、オーストラリアでは、一般語としての woods または forest に代る語として使用されるのである。ただ、例外として、pine forest, rain forest などの句の中では、'forest' を慣用的に使用することがある。また bush が使われる前は、brush (1799) が、亜熱帯植物に適用されて意味の拡大を生じ、「うっ蒼たる森林」の意味で使用されていた [Turner, p. 53 ; Baker, p. 77]。bush からは数多くの派生語が生まれ、to go bush 「奥地に逃げ込む；野生化する」、to bush it 「奥地で野営する；奥地で生活する」、to take (to) the bush 「(本来は囚人について) 奥地に逃げる；山賊になる；都会を離れる」、bushie (または bushy) 「奥地の住人；田舎者」、bushfire blond 「赤毛の女」、bush carpenter 「自己流の、未熟な大工」、bush costume 「青いやし、ベルト、キャベツヤシの帽子から成る服装」などの、品詞の転換を含む様々な表現が誕生しているが、その中のいくつかは既に廃用となっている。Sydney or the bush という句があるが、これは、'all or nothing' (DAC) 「いちかばちか」の意味で、産を成して都会で暮らすか、幸運に見放され、田舎で生活するか、の二者択一を暗示している。以下に用例を2つ示す。

There's an old saying, 'Sydney or the Bush'. Well, I was going bush, leaving Sydney far behind.—AND / 'Sydney or the Bush!' cries the Australian when he gambles against odds.—DAC

ついでに、bush に関連を持つ表現として、AustE 独得の 'up' と 'down' の用

法を挙げておく。go up the bush は「内陸部へ行く」(=go inland), その逆に「都市へ行く」は go down to the city と表現する。つまり, up the bush は「奥地・内陸部に」(=outback) の意味を持っている。

上に見てきた通り, field や woods だけでなく, meadow, copse, spinney, thicket, dale, glen, vale, coomb, brook, stream, rivulet, inn, village のような親しみのある美しい響きを持つ田園語には, 馴じみがない(恐らく文学用語か詩語のような語感を伴っていた) ためにほとんど使用されることはなく, 代わりに, bush を始めとして, brush, scrub, creek, creeklet, gully, swamp, waterhole などの語を採り入れたのである。例えば creek は, 一般には BrE では「入江」の意味を持つのに対し, AustE と NZE では 'stream, brook'(NZP OD)「川・小川」の意味として用い, gully は '(Aust.) valley'(APOD)「峡谷」の意味となる。これなどは, 一つには, 都市出身者が多かったことに起因している事実を示していると言える。初期の合衆国においても同様の現象が起きている。つまり, アメリカ人にとって, heath, moor, fen, spinney のような語は無縁に近いのである。NZE についても同じことが言える。環境の違いによる概念の差が用語の相違を来たすのは当然のことである。

(4)

牧畜業に関する語彙としてまず stock を例にとることにする。「(家畜, 特に) 牛」を意味するこの語から, 最初に出来た複合語は stockyard で, 1797 年以前に使われているが, 次々に同じ stock を要素とする複合語が生まれて行った。複合語は既存の語を組み合わせて作る簡便な造語法であるが, 以下に複合語が生まれて行く過程を一部だけ, 年代順に示すことにする。

stock-keeper (1800), stockman (1803), stockfarm (1806), stockhouse (1808), stockholder (1819), stockrun (1825), stockhut (1826), stockstation (1833), stockwhip (1845), stockhorse (1847), stockbook (1847), stockfarming (1849), stockrider (1859), to stock up (1878), stockroute (1886), stock-sick (1890), to stockkeep (1890), stock-agent (1897), stockist (今世紀)

といった具合である。このように次々に複合語を造り出しては、生活上の必要を満たしたのである。16世紀に起源を持つ stock は、1850年頃までは、オーストラリアでも本来の 'farm animals' の意味に用いたが、1850年以後は 'cattle' の同義語として使われるようになっていく。従って、stockman は今では「牧夫、牧場の雇人」、stock-keeper は「家畜番、牛飼い、牧夫」、stock-rider は「乗馬牧夫」でカウボーイに近い語である。アメリカ西部の荒くれ男 'cowboy' も、ここでは「(若い) 搾乳者」の意味になってしまう。stockwhip は「去勢牛を追い立てる時に用いる鞭」で、bullocky「牛追い」(bullock-driver とも言う) がこれを使って牛を駆り集めたりした。bull puncher, bull-ocker, cow conductor などは皆「牛追い」を表す。

この他の牛に関係ある語として、poddy「小牛(焼印のない)；人手で育てられた子牛」、duffer「牛泥棒」(duff:「盗んで焼印を変える」) などが挙げられる。ropeable という語があるが、これは「ロープで御せない程の荒くれ牛」に対して用いられ、ここから「立腹して(=angry)」という現在の意味に転意している。

馬に関する語として、brumby「野馬、荒馬」、buckjumper「あばれ馬、跳ね馬」、to buck「背を丸め足を突っ張って跳ね上がる」などがあるが、俗語としての用法に、to buck at (against) ~ 「~に反対する、抵抗する」、to have a buck at ~ 「~を試みる」のような慣用句が現在使われている。

牧羊業に関する語彙は、既に言及している station, run, mob, muster 等を始めとして、今日までに実に豊富で多種多様の語群に発達しているが、世界でもニュージーランドと並んで有数の牧羊国である故に、当然のことであろう。1933年に出た L.G.D.Acland の "Sheep Station Glossary" は1890年から1910年までの牧羊用語を扱っているが、最近のものでは、シドニー大学の Australian Language Research Centre から1965年に出された G. S. Gunn, "The Terminology of the Shearing Industry" (Part I & II) (*Occasional Papers*: No.5 & No.6) に詳細な解説があって有益である。

woolshed は「羊毛刈り小屋」、skillion「毛刈りの順番を待つ小屋」、woolclas-

sing「(刈り取った)羊毛の選別」(woolclasser:「選別者」), pannikin boss「牧羊場労働者の監督」, rousie(または rouseabout)「牧羊場の雑役夫」(bluetongueとも言う), ringer「最もすぐれた羊毛刈り職人」, crawler「羊飼い」(元来は囚人用語。「(仕事をさぼる)無能な者」)などの語があるが, monkeydodgerも「牧夫」を表す表現で, 'shepherd' という語は AustE から今日ではほとんど消滅している。「1歳の羊」は two teeth, 「2歳の羊」は four teeth, 「4歳」は eight teeth (または full mouthed) などと言う。その他, 「熟達した毛刈り職人」を表す語はいろいろあり, gun, deucer, gun deuce man, dread-nought, 等と呼ぶが, 逆に「毛刈りが一番遅い者」は drummer と言う。その他, 羊刈りの道具を始め, 牧羊業に関する語彙や表現は実に多彩である。

地方の労働者を表す語彙の中には, 「牧羊場の見習い」を意味する jackeroo (ACOD: Austral. colloq. 'trainee on sheep-station') があるが, 牧場で牧羊業を学ぶ未経験の若者のことで, colonial experiencer とも呼ばれた。「小農」は cockatoo, 短縮して cocky とも言うが, cockatoo settler「小農入植者」, cow-cocky「酪農家; cow-banger とも言う」, fruit-cocky「果実を作っている農民」などの句の他に cocky's joy「糖蜜」という俗語が生まれている。

(5)

植民地時代の語彙を中心に記述を進めて来たが, Australianism を, 発音を除く語彙に限定して言えば, 便宜上, 次のように分類出来るであろう。

(i) 標準語に属さない俗語・地域方言をそのまま, あるいは意味を修正して用いた語(句): [残存語]

(ii) 一般標準語の要素を用いて形成された複合語または派生語, あるいは意味変化・機能変化を与えて適応させた語(句):

[改造語, 新造語]

(iii) 土語(その他の言語)から借用した語(句):

[借用語]

以下, 上の項目に従って, (i)と(ii)を順に検討することにする。

(i) 残存語

初期の移住者が本国から持ち込み、残存した俗語や地域方言は、本国では全く一般化しなかった語である。それらの中から、オーストラリアで広く使用された後に、本国に逆輸入され、起源も忘れられて一般化した語もある。本来、方言で使用されていた語が俗語に入り、それが AustE の一部になっているものとして、school「ギャンブル仲間；飲み仲間」（元来は「泥棒や乞食仲間」）、long-sleever「背の高いビール用グラス」、shake「盗む」などが挙げられるが、これらは本来、泥棒や悪漢の隠語(cant)に属していたもので、この他、larrikin「与太者、ならず者」、swag「(奥地旅行者・放浪者などが携帯する)身の回り品を入れた包み」（本来は「略奪品、盗品」）、plant「かくす」など、この種の俗語から入ったものであり、意味が変化したものもある。地域方言から AustE の中に入った語として、rouseabout「牧羊場の雑役夫」（元は「流浪人」）、skillion「毛刈りの順番を待つ羊の小屋」、buster「墜落；強烈な、冷い南風」（以上3語、イングランド南部）；knockabout「農牧場の臨時雇人」（元来「放浪者」）、ringer「最も腕のいい羊毛刈り職人」（元は「最上のもの、極上のもの」）（以上2語ヨークシャー）；boomer「特大のもの」（ウォリックシャー）；barrack「声援する；非難する；からかう」（アイルランド）；stonker「挫く」(stonkered「うちのめされて；へとへとになって」)（スコットランド）；sheila「若い女性」(アイルランド?) などがあり、各語末の()は方言として使用されていた地域を示している。

これまでに挙げた語のうち、larrikin を筆頭に、to barrack, cobber「仲間、友達」、to fossick「捜し回る、あさる」、skerrick「少量、小片」、to chiack「からかう、馬鹿にする」（元来は「ほめ言葉、称賛」）、wowser「清教徒の狂信者；潔癖家」、dinkum「本物の、正真正銘の、本当の」などの語が英本国に逆輸入されて、使用されている[Brooks, p. 131]。

奥地の生活に関係のある billy「ブリキ製湯沸かし」、tucker「食糧」、damper「(熱い灰で焼いた)パン種抜きの堅パン」等、いずれも方言から入っている。なお、1851年の金鉱発見以来、鉱山用語として使われた語彙の中には、方言

起源のものが多数ある。

(ii) 改造語・新造語

すでに、stock や station を基に造られた複合語や派生語の例は、紹介してある。また、bush についても説明した。ここでは、少しばかり、最も初期の移住者たちが、新しい事物・動植物に対してどんな語をどのように造り出し、必要を満たしたか、代表的な表現を取り上げてみたい。

初期の人たちは、動植物、魚、鳥、草木を表現するのに、既知の語彙、特に一般的な標準語の要素を組み合わせ用を足した。まず、本国で使っていた語を類似した対象に当てはめ、hawk, eagle, crow, pigeon, cherry-tree, apple-tree, oak, cedar などの語で表現し、成育地を冠して、Sydney blue gum, Sydney cedar, swamp oak, swamp mahogany などと命名したりした。

次に樹木に対して、その外形、材質、樹皮などの特性をうまく捉えて、例えば beefwood, bloodwood, cheesewood, corkwood 等は、木材の性質や色から、bottle tree, blackboy 「ユリ科の常緑かん木」、celery-topped pine, leopard tree は外形・外観から、stringybark, ironbark, paperbark は樹皮の性質から命名されたものである。

次に昆虫や鳥について見ると、例えば蟻のかみ方の獠猛さから bulldog ant と表現し、その鳴き方が御者の鞭打つ音に類似していることから、coachman's whipbird 「ヒタキ科の鳥」と命名し、これは短縮して coachman とか whipbird とも言ったが、同様に、その鳴き声がロバの鳴き方に似ていて、人を笑っているように聞こえるところから、laughing jackass と名付けられた鳥（オーストラリア産大かわせみ）もいるが、初期の命名者たちの想像力、創造性の豊かさの一端を示している興味深い例と言えよう。この鳥は土語では kookaburrra と呼ばれている。同じく鳴き声から命名された鳥として、razor-grinder 「ヒタキ科の鳥」、bellbird が挙げられる。lyrebird は「コトドリ」で、その琴状の尾の形から名付けられた鳥である。その他、鳩の外形からの命名として bronzewinged pigeon (元は golden-winged pigeon と言っていた。単

大瀧 真

に *bronzewing* とも言う) という例がある。

tea tree は茶の代用品がその葉から作られたことから名付けられ, *raspberry-jam wood* は木を切ると *raspberry jam* そっくりの味をした物質が出たところから付けられたものである。

AmE も、複合語構成を好む言語である。Markwardt の *American English* には、初期の北米遠征隊の日誌の中に記録された語彙の分析が出ているが、それによると、713 のアメリカニズムのうち、216 が複合語である [Markwardt, pp. 86-7]。

最後に、*bushranger*, *blackfellow*, *breakwind* 等の複合語について触れることにする。*bushranger* は19世紀始めに活字になって現われ、元来は「奥地に逃げた脱獄囚」を意味したが、今では「山賊」(*ACOD*: 'Australian brigand living in the bush') の代名詞になり、意味内容が低下している。*blackfellow* は「アボリジニーズ (原住民)」, *breakwind* は「防風林」を意味する。*black-tracker* という語は、奥地の中を犯人や迷子の人を探索するために使われた原住民のことで、今は廃語。次に、*offsider* は口語で「助手, 仲間」(*ACOD*: 'assistant, partner, deputy') を意味する語である。

以上の例が示すように、この種の複合語による造語法は決して珍しいことではないが、英本国では経験したことのない未知の事物に接したオーストラリアへの移住者たちが、必要に迫られて案出した数々の複合語は、概して直截・明快・多彩で実物を彷彿させるが如く生き生きしており、AustE 特有の俗語表現や慣用句と共に、彼らの創造性の豊かさを示していると言っても過言ではない。

なお、(iii) 借用語については、章を改めて検討したい。

IV 借用語

(1) 現住民語からの借用

18世紀末に入植した当時、オーストラリアには約600の原住民諸語が存在

していたと言われ、約30万人の原住民がいたと推定されている。W.Schmidt や A.Capell によってその言語が研究されているが、不明の点が多い。ポート・ジャクソンの土語から借用されたものが最も多く、最初、音を聞いて文字に転写し、英語式に綴り字を表す時、記録者によって何通りもの形が生じることになる。例えば waddi「戦闘用棍棒」は、wad-di, wad-dity, woo-da, woo-dah のように記録されている。また boobook「ヨタカ」には bok-bok, pow-book などの違った綴り字がある。ポート・ジャクソン地域の住民語は Hunter (1790) と Collins (1798) によって収集され、記録されているが、現在でも AustE の語彙の一部になって使用されているものが結構多い。次に比較的よく知られている土語を示す。

jarrah [西オーストラリア産ユーカリ], coolibah [頑丈な数種類のユーカリを指す], wandoo [白い樹皮の西オーストラリア産ユーカリ], myall [アカシアの1種], gidgee [小型のアカシア]; wallaby [小型カンガルー], quokka [前に同じ], bettong [ねずみカンガルー], wallaroo [岩の多い地域や山岳地帯にいる大型カンガルー], warrigal [犬; 野性の馬], brumby [野性の馬], wombat [ふくろぐま (夜行性有袋動物)], joey [カンガルーまたは他の有袋類の子], bunip [奥地の沢・谷に住むという伝説上の怪物]; bookbook [中型のふくろう: ヨタカ], mopoke [前に同じ], kookaburra [わらいかわせみ], budgerigar [セキセイインコ]; bardi [原住民が食用とする幼虫]; hielamon [樹皮の盾], nulla nulla [堅木の棍棒], kylie [ブーメラン], waddy [戦闘用棍棒]; coolamon [水運搬用の木製または樹皮製の容器], dilly [(草や樹皮で作られた) 袋または籠]; corroboree [原住民の神聖な祭り, または戦いの踊り; お祭り騒ぎ, 社交的集い], binghi [原住民; 兄弟], gin [原住民の女], lubra [前に同じ], myall [狂暴な原住民; 乱暴な], gunyah [原住民の小屋], humpy, miamia, wurley [3語とも前に同じ]; bing(e)y [胃, 腹], yakka [仕事], gibber [丸石, 大石], willy-willy [大旋風; 強い熱帯性暴風]。

大瀧 真

シドニーから移住者たちが内陸部に移動し、また海岸沿いに進むにつれて、ビクトリア、クイーンズランド、西オーストラリア、南オーストラリア、タスマニアなどの他の種族の言語からも借用されて行った。従って、同一の樹木や原住民の小屋を表す名称が何種類も生ずることになる。初期においては、baal (= not; no), budgerie (= good, excellent) といった語が Aboriginal pidgin として広範囲に使われていた。

借用語よりも、英語の名称（複合語）の方が好んで使われる場合があったが、その例として、lyrebird と laughing jackass (または settler's clock) を挙げる事が出来る。前者は bulln-bulln, 後者は kookaburra という語よりも一般的に使用されることが多く、kookaburra は19世紀まではやらなかった。

シドニー近辺の土語からの借用が一番多いのは、初期において最も接触が多い地域だったからだが、この借用の仕方は、ヴァージニア州やマサチューセッツ州で白人が最初に交渉を持ったアメリカ・インディアンのアルゴンキアン語族からの借用語が圧倒的に多かった米国の場合と非常に類似していると言えよう [cf. Marckwardt, p. 26]。1964年、シドニー大学から出た “The Currency of Aboriginal Words in Australian English” という論文によると、200語の土語のうち（そのいくつかは廃語になっているが）、3/4が動物と植物名になっており、広く知られているのは、せいぜい数十語だろうと推定されている [*Occasional Paper*, No.3]

(2) AmE からの借用

アメリカとの関係は、早くも1800年代に捕鯨船員、アザラシ漁夫がポート・ジャクソンに立寄った時に端を発するが、AmE の影響が強く見られるようになるのは、1851年、アメリカに次ぐゴールド・ラッシュが起こり、1852年から56年にかけて、カリフォルニアの金鉱から16,000人の鉱夫たちが大挙してオーストラリアへ渡来するようになってからである。50年代にアメリカからやって来た鉱夫は、金の採掘技術や機具類も持ち込んだが、彼らからは鉱

山用語だけでなく、一般用語も借用した形跡がある。これより前の1849年に約800人のオーストラリア人鉱夫がカリフォルニアへ出て行き、1851年にその大部分が帰国している。従ってこの期間中に、何らかのアメリカニズムを持ち帰ったであろうことは、想像にかたくない。例えば、cradle「選鉱器」、digger「採金鉱夫」、diggings「採鉱地；金鉱」、dirt「粗鉱；廃石」、pan「選鉱鍋」、to pan off「(選鉱鍋で)砂金を洗い出す」、to pan out「金を産出する」、gold fever「金鉱熱」などの鉱山用語は、AmEから借用された例である。英国の俗語、あるいは地域方言からAmEに入り、そこから借用されたケースが多い。

以上の他、すでに言及した bush, bushranger, squatter, township などの語も、AmEからの借用語と見てよい。第二次大戦中、1943-45年に、米軍がオーストラリアへ多数来駐したが、この期間にも、アメリカニズムをある程度借用し、AustEの中に吸収したことは間違いない。だが永久的な痕跡を残したとは思われない。むしろ、最近の映画、TV、ラジオ等のマスメディアによる影響の方が大きく、アメリカニズムを取り入れ、アメリカ式インターネットを模倣する者があるなど、その影響は見過ごすわけにはいかないであろう[Partridge & Clark, pp. 87-8; Mitchell & Delbridge (1971), pp. 31-2]。

V AustE 特有の口語・俗語表現

AustEの語彙の特徴の一つは、その発達の経緯から見ても明白のように、BrEやAmEとも異なる AustE 特有の口語と俗語を多量に含み、かつ、多様性に富んでいることである。口語と俗語を中心に、慣用的表現にも言及しながら、その多様なオーストラリア的特徴を以下に記述することにする。

(1) Bush Idiom

奥地で生まれたオーストラリア独得の慣用に 'bush idiom' がある。動植物

大瀧 真

や自然の風物を用いて比喩的に表現する句で、都会にまで広く普及した庶民のことばである。例えば‘Stone the crows!’, ‘Starve the lizards!’, ‘Stiffen the snakes!’などの句は驚き・嫌悪・不信などを表す感嘆詞で bush に関係した句であり、表現を多彩ならしめる効果を持つ。特に動植物を比喩的に用いた直喩 (simile) は、極めてユニークな表現が多い。

頭がつるつるに禿げていることの形容に ‘as bald as a bandicoot’ (bandicoot: 食虫性有袋類) と表現し、頭が狂っていることを, ‘as mad as a gumtree full of galahs’ (galah: オーストラリア産おうむ) とか, ‘as mad as a goanna’ (goanna: 大とかげ) のように言う。この他 ‘as game as Ned Kelly’ (=very brave; Ned Kelly (1855-1880): 悪名高い山賊の名前), ‘like a hot wave from a bushfire’ (=extremely hot), ‘tough as a fencing wire (または ironbark)’ (=very tough), ‘sick as a blackfellow’s dog’ (=seriously ill); ‘up a gumtree’ 「途方に暮れて、進退きわまって」、‘the other side of the Black Stump’ 「果てしなく遠い」、‘out in the never never’, ‘back of Burke’ (2例とも前に同じ), ‘there’s a bug in the billy’ 「まだ困っていない」等、枚挙に暇がない。‘Send her (または it) down, Hughie!’ は「(雨乞いの文句) 雨よ、どンドン降れ!」を意味している。以上の例からわかるように、AustE の直喩は生き生きして鮮明なのが特徴である。

(2) 固有名詞を用いた表現

人名や地名を用いた慣用的な表現を以下に示す。例えばある分野で代表的な人物、あるいはある種の特徴や性向を示す典型的人物の名を取って ‘Johnny War der’ 「飲んだくれ」、‘Jimmy Woodser’ 「独りで酒を飲む男；独酌」、‘Up there Cazalry!’ 「頑張れ、いいぞ!；Roy Cazalry (1893-1963): 豪式フットボール名選手」、‘do a Melba’ 「何回もさよなら公演をする；Dame Nellie Melba (1861-1931): ソプラノ歌手」、‘furphy’ 「虚報、馬鹿げた話；Furphy carts : 第一次大戦中 Furphy 家が設立した会社が製造した給水車」、‘furphy king’

「吹聴して回る人」, 'Jacky Howe' (毛刈り職人や労働者が愛用する) 濃紺または黒の半袖シャツ; John Robert Howe (1861-1920): 1890年代の毛刈りチャンピオン」などの語句が生まれている。この他に, 'work like Jacky' (熱心に働く; Jacky: 原住民の男の通称), 'sit up like Jacky' (真直ぐに坐る; 無邪気に振舞う), 'Blind Freddie' (盲目のフレディ (伝説上の人物で, シドニーの行商人のあだ名): 最も知覚力のない人, 馬鹿者), 'Buckley's chance [hope]' (NZPOD: 'small hope, no chance at all') (むなしい望み, 少しのチャンス) 等の慣用句を挙げることが出来るが, 最後の2つの句は, 例えば "Even Blind Freddie could see that!" 「どんな馬鹿でもそんなことはわかるぞ!」とか, "He hasn't got Buckley's chance of winning." 「彼には勝ち目がない」のように用いる。特に Buckley's は NZE でも使われている句である。

地名が使われた句として, 'Hay, (and) Hell, and Booligal' (Booligal: ニューサウスウェールズにある町名。不快きわまりない場所を暗示する句), 'to shoot through like a Bondi tram' (大急ぎで逃亡する (姿を消す); Bondi: シドニー郊外の名前。), 'gone to Moscow' または 'in Moscow' (質入れして (= pawned; Moscow: 俗語で質屋の意。), 'no good to Gundy' (全く役に立たない, 実によくない) などが代表的なものとして挙げられるが, Barcoo (クイーンズランド西部の川の名) を用いた句は, 'Barcoo buster', 'Barcoo salute', 'Barcoo spew' (または vomit) など多数造り出されている。

(3) 指小辞 (-o, -ie, -y 等) と短縮形

独得の接尾辞による造語法がある。-o, -ie, -y, -ssie, -zzie 等を用いて親密さを表す AustE 特有の変形で, 語数も多く特徴的と言える。-o の例として *evening*, *arvo* (afternoon), *cobbo* (cobber), *sonno* (son), *jello* (jealous), *journalo* (journalist), *confo* (conference), *recepto* (reception), *milko* (milkman), *smoko* (「休憩時間」) などがあり, 地名や人名にも用いて, *Darlo* (Darlinghurst), *Paddo* (Paddington), *Billo* (Bill), *Jacko* (Jack) のように使う。-o 以外の

接尾辞による例を次に示す。roughie (rough), hottie (hot), shrewdie (a shrewd person), possie (position), newie (a new idea), trukie (truck driver), sickie (「病気休暇；ずる休み」)；umpy (umpire), simpy (simpleton)；Chrissie (Christmas), Aussie (Australia(n))；lizzie (lizard), pressie (present), Tazzie (Tasmania(n)), mozzie (mosquito) 等である。

語の短縮の例として, roo (< kangaroo), dile (< crocodile), mu (< emu), pom (< pommy「英国からの新入植者」), House of Reps (< House of Representatives), dig (< dignity), la 及び lala (< lavatory), delink (< delinquent), com (< commo < communist), beaut (< beautiful または beauty) 等を挙げることが出来る。

(4) 俗語表現

俗語については、既に多くの語に言及して来たが、ここでは今まで触れなかったものを重点的に取り上げてみたい。AmE の場合と用語が異なる例として、「浮浪者」は AustE で sundowner (AmE: 'tramp', 'hobo'), 「食物」は tucker (AmE: 'grub'), 「重労働者」は grafter (AmE: 'hard worker'), 「女性」は sort または sheila (AmE: 'dame'), 「キャンデー」は lollies または sweets (AmE: 'candy'), 「酔払った」は AustE で shickered または full as a goog (AmE: 'pie-eyed', 'plastered') などのように異なる語句が使われる。「友人」は AustE で cobber, 「素晴らしい, 良い」は bonzer, 「言い寄る」は smoodge, 「悪い, ひどい」は crook というが, AmE も BrE も 「詐欺師」は 'crook' であるのに対し, AustE は spieler である。次に慣用句を示す。

barrack for ~ 「~を応援する」, poke barrack at ~ 「~をひやかす」, go bung 「失敗する；破産する」, put the acid on ~ 「~にねだる, 強要する」, chiack 「からかう, 馬鹿にする」, sling off at ~ 「~をあざける」, put the nips in 「金の融通を頼む, 借りる；たかる」, be jack of ~ 「~にうんざりしている」, have a derry on ~ 「~に偏見を持つ, ~を嫌う」, come the raw prawn on ~ 「だま

そうとする、欺く」、go crook「立腹する」、do one's block「前に同じ」、up to putty「価値がない、質が悪い」、go troppo「気が狂う」、run a stumer「破産する」、on the nose「良くない、役に立たない」など無数にある。「一文なし」は not a (brass) razoo;「安酒」は plonk, nelly;「警官」は John, walloper, crusher, trap;「間抜け」は dill, drongo, twit, nong, galah, gig, mutton head など、種類も多岐にわたり、廃語化しつつあるものを加えればおびただしい数に上るだけでなく、実に多彩である。

‘Cockney Slang」と呼ばれる rhyming slang について、Baker は、第一次、第二次世界大戦中に普及したこと、単調で余り痛烈でもなく想像性に乏しい種類の俗語であるから、オーストラリア人は余り使いたがらないと述べているが、一方、俗語の権威 Maurer は米国の暗黒街では ‘Australian Rhyming Argot’ という異名で多用されている事実に言及している [Baker, pp. 358-366; Maurer, pp. 183-195]。Baker は具体的に数字を挙げて、オーストラリア起源のもの数が少ない事実を指摘している。次に代表的なものを二、三紹介するにとどめておく。knock-me [-silly] (‘billy’), rub-a-dub [-dub] (‘pub’; rubby, rubberdy, rubbity と短縮), Oscar Asche (‘cash’; 単に Oscar と言う), Ned Kelly (‘belly’), Sydney Harbour (‘barber’), Onkaparinga (‘finger’; onka と短縮), Captain Cook (‘look’), post-and-rail (‘fairy-tale’; lie, falsehood), on one’s Pat Malone (‘on one’s own’, ‘alone’; on one’s pat とも言う), 等。

Rhyming slang は、元来ロンドンの下町で生まれ、ロンドン子に愛用された俗語であったという事実を考慮に入れて考えるならば、Cockney の使い手たちが多数シドニーに渡り、この種の俗語を普及させ、オーストラリアの風土で新しい色づけを施され、オーストラリア的な一風変わった俗語が誕生したと考えてもおかしくなさそうである。

VI 結 語

その広大な国土にもかかわらず、オーストラリアには地域的方言はなく、

大瀧 真

言語に均一性が見られるとされている。発音については、全土に3種のスタイル(変種)が認められるが[Mitchell & Delbridge (1965), pp. 35-38], 語彙については、地域的差異はほとんどないと言ってよい。AustEはその起源から明らかのように、主として英国諸島から渡来した初期入植者たちがもたらした、18世紀のロンドン、あるいは地方の工業都市とそれらに隣接する地域で用いられていた俗語や種々の地域方言及び一部の者たちが使用していた標準英語を基礎として、雑多な言語が共存する言語状況の中から、英本国とは異なる地理的環境と様々な条件の下で、今日のAustEの特質が形成されて来たと言えよう。そして、このようなオーストラリア的な言語的特性は、語彙面については、植民地時代、即ち、1788年に最初の入植が行われた時期から、1850年代に起った未曾有のゴールドラッシュの時代へ至る期間に、ほぼ揃い、それをベースに以後AustEは発達を続け、一層口語的色彩を強めながら、ほぼ1890年代に、BrEと異なる新種の文語と口語が出現したと推測され、一方、音声面に関しては意外に早期に、1830年代までには、AustE特有の発音の基盤が確立していたと推論されている[Mitchell & Delbridge (1971), p. 30]。

英方言や古い俗語に由来する残存語のあるものは、意味を修正して適応され、その一部は英本国に逆輸入されて一般化した語彙もある。俗語の中には、cantに由来するものが少数あり、その語の持つ本来の意味が変化して、今日では違った意味で使われている語もある。また、既存の一般語の要素を用いて数多くの複合語や派生語が造り出され、意味内容や形態を変化させたり、機能変化を与えて適応させた語句も生み出され、例えば、初期移住者たちが造り出したbeefwood, stringybark, lyrebird, laughing jackass, bushman's clock, razor grinder, bulldog antなどの動植物や昆虫などの名や、bushfire, bush lawyer, emancipist, brickfielder, banker, post and rail tea「粗末なお茶」、Jack the painter「奥地の粗末なお茶(飲んだ後、口に色がつくことから)」などの語句や、もっと後期に生まれたflying doctor, bush telegraph, ropeable, bushfire blonde, stargazer「よく転倒する馬」、no-hoper「無能な(人)」などの

表現は、知的な想像力でひねり出した生成物というより、卒直、直截な表出の結果としての、生き生きと鮮明なイメージを与える類の、叙述的な単純明快な語彙であるところに特徴があり、命名者たちの想像力が生み出したたくまざる産物と言えよう。

現住民の言語から借用した語のうち現在も使われている数十語の他に、AmEから、特にゴールドラッシュ時代と第2次大戦中に借用されたとされる語句が若干あるが、他民族の言語からの借用関係はほとんど認められていない。NZEの語彙は、発音と同様 AustE に依存する度合は高く、口語・俗語の中には共通する語句が多数指摘されている。

Rhyming slang を始めとして、俗語的表現が豊かなのは、AustE が持つ口語的性格を裏づけるものであり、例えば、come the raw prawn「だまそうとする」、big-note oneself「自画自賛する」、two-bob wine「安酒」、home and hosed「(仕事・旅などを) 無事に終えて」、tickle the peter「金銭を盗む」、go troppo「気が狂う」などの俗語は活力と生氣あふれた表現であり、また pom, beaut, roo, the dry「乾期」、bottle-o(h)「空き瓶回収業者」、arvo, sickie などの口語は 'Aussies' が短縮と指小辞を愛好する傾向があることを示していると言えるであろう。

BrE に基盤を置きながら、BrE や AmE とも異なる色彩豊かな、いわば普段着的、簡明卒直な表現を豊富に持つ英語の異種を発達させて来たのである。しかし、将来、移民の増加とそれに伴う言語的・文化的多様化が進んだ場合は、当然、AustE も何らかの変化を受けるものと予想され、一言語主義から多言語主義への移行を余儀なくされる時代が到来するのではないかと思われる。

参考文献

- Baker, S. J., 1943 'The Influence of American Slang on Australia',
American Speech, Vol. 18, No. 4, pp. 253-6.
- , 1966. *The Australian Language*, Sydney: Currawong Publishing Co. 2nd ed.
- Brook, G. L., 1972. *English Dialects*, London. Andre Deutsch. Franklyn, J., 1953.
The Cockney: A Survey of London Life and Language, London:
Andre Deutsch.
- , 1975. *A Dictionary of Rhyming Slang*, London: Routledge & Kegan Paul
- Marckwardt, A. H., 1958. *American English*, New York. Oxford Univ. Press.
- Mathews, W., 1970. *Cockney Past and Present: A Short History of the Dialect of
London*, Detroit. Gale Research Co.
- Maurer, D. W., 1944. "Australian" Rhyming Argot in the American Underworld',
American Speech, Vol. 19, No. 3, pp. 183-95.
- Mitchell, A. G. & Delbridge, A., 1965. *The Speech of Australian Adolescents: A
Survey*, Sydney: Angus & Robertson.
- , 1971. *The Pronunciation of English in Australia*, Sydney:
Angus & Robertson.
- Morris, E. E., 1898. *Austral English: A Dictionary of Australasian Words, Phrases
and Usages*, London: Macmillan.
- Partridge, E. & Clark, J. W. et al, 1968. *British and American English Since 1900*,
New York: Greenwood Press.
- Partridge, E., 1970. *Slang Today and Yesterday*, London: Routledge & Kegan Paul.
4th rev. ed.
- Potter, S., 1975. *Changing English*, London: Andre Deutsch. 2nd rev. ed.
- Pyles, T., 1952. *Words and Ways of American English*, New York: Random House.
- , 1971. *The Origins and Development of the English Language*, New York:
Harcourt Brace Jovanovich, Inc. 2nd ed.
- Ramson, W. S., 1966. *Australian English: An Historical Study of the Vocabulary,
1788-1898*, Canberra: Australian National Univ. Press.
- (ed), 1970. *English Transported: Essays on Australian English*, Canberra:
Australian National Univ. Press.
- Sheard, J. A., 1954. *The Words We Use*, London: Andre Deutsch.
- Troubridge, V., 1946. 'Some Notes on Rhyming Argot', *American Speech*, Vol. 21,
No. 1, pp. 45-7.
- Turner, G. W., 1960. 'On the Origin of Australian Vowel Sounds', *AUMLA*, No. 13,
pp. 33-45.
- , 1967. 'Samuel McBurney's Newspaper Article on Colonial Pronunciation',

- AUMLA*, No. 27, pp. 81-5.
——, 1972. *The English Language in Australia and New Zealand*,
London: Longman. 2nd ed.
Wilkes, G. A., 1978. *A Dictionary of Australian Colloquialisms*, London: Routledge
& Kegan Paul. [略語: DAC]
Australian Language Research Centre (Sydney Univ.), *Occasional Papers*,
No. 1(1964)~No. 14(1969).
マニング・クラーク (竹下美保子訳) 『オーストラリアの歴史』 サイマル出版会

なお上記のほか、次の辞典を参照した。項目の末尾の〔 〕内は本稿に使用した略号を示す。

- The Australian Pocket Oxford Dictionary*,
Melbourne: Oxford Univ. Press. 1976. [APOD]
The New Zealand Pocket Oxford Dictionary,
Auckland: Oxford Univ. Press. 1986. [NZPOD]
The Australian Concise Oxford Dictionary of Current English,
Melbourne: Oxford Univ. Press. 1987. [ACOD]
*The Australian National Dictionary: A Dictionary of Australianisms
on Historical Principles*,
Melbourne: Oxford Univ. Press. 1988 [AND]
The Oxford English Dictionary, Oxford: Clarendon Press. 1970. [OED]